

あまねく

amaneku

はじめに

ご挨拶

障がい学生支援広報誌「あまねく」発刊によせて

学生支援センター所長 真銅正宏

関係各位におかれましては、同志社大学の障がい学生支援の取組みにあたたかいご支援、ご協力を賜り、本当にありがとうございます。

本学では、2002年1月に、教務部から当時の学生部へ、障がいのある学生に対する修学支援についての所管が移管され、それ以降、学生部および組織改編後の学生支援センターが中心となって、支援内容を充実させるべく努力してまいりました。

明治8年(1875年)に、校祖新島襄が、キリスト教主義を建学の精神として、京都寺町の地に同志社英学校を開校して以来、同志社では、徳育の基本として、他者へのいたわり、社会的弱者への支援の姿勢を重視してまいりました。

その伝統は、現在にも脈々と受け継がれており、昭和24年(1949年)には、日本の大学で初めて点字による入学試験を実施するなど、これまで障害のある学生に対する修学支援の取組みを積極的に進めてきております。

現在、同志社大学では、学生支援センター内の障がい学生支援室を中心に、さまざまな部署が連携をとりながら、幅広い修学支援を展開しています。具体的には、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、内部障害について、障害の種別や程度に応じた授業保障を中心に、キャリア形成・就職活動支援までを含む支援です。

また、平成16年(2004年)10月には、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)の連携校となり、さらに平成18年(2006年)10月からは、日本学生支援機構<JASSO>の障害学生修学支援ネットワーク事業の拠点校として、学外諸機関との連携事業も行っております。

このような活動の一環として、このたび、本学のこのような障がい学生支援の取組みについて、学内外の障がい学生支援に携わる皆様や教職員、学生、そして一般市民の方々に広くお知らせすることを目指し、広報誌を発刊する運びとなりました。

この広報誌が、大学等教育関係者だけでなく、まだ十分とはいえない障害に対する社会の理解をも深める一助とできればと願っています。

また、広報誌の発刊に先立ち、2010年12月には、「障がい学生支援ホームページ」を開設しております。併せてご高覧いただければ幸いです。

障がい学生たちにとって、そしてわれわれ大学に関わるすべての人々にとって、よりよき教育環境および生活環境が築かれていくこと、そして、そのような環境の実現のために、この広報誌が少しでもお役に立てればと心より願っております。

2011年3月

目次

2010 アメリカ視察だより	3
高大連携事業 2008~2010	4
アメリカの高等教育における聴覚障害支援について	6
【2010年度の活動紹介】	
教職員研修会	7
学際科目「心のバリアフリー」をめざして	8
Challenged キャンプ 2010	9
PEPNet-Japan シンポジウム 2010	10
【学生の活動について】	
2010年度PEN-International イギリス夏期リーダー研修会への参加	11
ランチタイム手話・京田辺燭火讚美礼拝・クリスマス礼拝	13
障がい学生支援コーディネータの活動	14
同志社大学障がい学生支援室の紹介・編集後記	15

2010アメリカ視察だより

2010年6月18日、アメリカのPEN-Internationalが主催するPEN-International ビジネスミーティングおよびNTID(National Technical Institute for the Deaf: 以下、NTID) テクノロジーシンポジウムへ、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) 連携大学・機関のメンバーとして招待を受け、アメリカのロチェスター市へ向かうべく、6人のメンバーが成田空港に集合した。

集合したメンバーは、筑波技術大学 大沼直紀前学長、筑波技術大学 荒木勉教授、PEPNet-Japan 白澤麻弓事務局長、PEPNet-Japan 蓮池通子事務補佐員、神戸松蔭女子学院大学星かおりコーディネーター、そして私である。

しかし…、成田空港で搭乗するやいなや「機材トラブル確認のため…」 「『労働時間超過』によるクルーの交代を…」 「サンダーストームにより…」 「着陸不可能で…」 と、急ぎょ行程にはなかったMinneapolis St.Paul空港に向かい、空港の床で一晩を明かすことになった。

こうして、かたい絆で結ばれた6人は、現地で先に到着していた筑波技術大学 村上芳則学長、須藤正彦教授と合流し、6月20日(日)PEN-Internationalのビジネスミーティングに参加した。

PEN-International は2010年で10周年という節目の年を迎え、日本、中国、フィリピン、チェコ、ロシア、タイ、韓国、ベトナム、香港と、9カ国19大学・機関の報告がなされた。中でも特に興味をもったのは、ロシアの発表である。ロシアでは、政府からの援助を受け、大学教育を受けにくい層の子供たちに対して「Pre University Program(入学前プログラム)」を提供するなど積極的な支援を行っている。支援対象の中に聴覚障がい児も含まれ、大学に行ける学力をつけるため、早期から取り組んでいた。

また、アメリカのロチェスター工科大学(RIT)では、約17,000人在学生のうち、聴覚障がい学生が約1,400人、そして専任のプロの手話通訳者125人、プロのC-Print通訳者(特殊な入力方法によるパソコン通訳)50人、学生ノートテイカー320人がいつもフル稼働しているというからすごい。日本もいつかこのような時代がくるのだろうか。

6月21日、Tech Symposium-Technology and Deaf Educationでは、長らくNTIDの運営を支援してこられた日本財団の笹川会長から基調講演があり、元PEN-International代表で現NTID学部長/RIT副学長を務めるJames.J.DeCaro教授の功績を讃え、これまでNTIDに送られてきた笹川良一奨学金の名称を笹川良一&James.J.DeCaro奨学金に変更するという記念すべき瞬間に立ち会うことができた。また、21日の夜は10周年を記念して18世紀のアメリカを再現したGenesee Country Village & Museumでパーティーに招待いただいた。広大な敷地の中を馬車に乗っての散歩は、心身ともに最高のご褒美であった。

今回、PEPNet-Japanで特派員ブログを立ち上げていただき、連日現地からの報告をブログにアップしたのでは是非見られたい。特に、各国の取り組みと最先端テクノロジーは必見!日本の環境と文化に合う形で取り入れていきたい。

PEPNet-Japan 特派員ブログ URL

<http://www.tsukuba-tech.ac.jp/ce/xoops/modules/tinyd1/index.php?id=156&tmid=142>

障がい学生支援コーディネータ
土橋恵美子(手話通訳者)



高大連携事業 2008~2010

文部科学省 障害学生受入促進研究委託事業

～障害のある生徒の進学・支援のための高大連携の在り方に関する調査研究～

本学は、2008年度から2010年度にかけて、文部科学省障害学生受入促進研究委託事業に採択され、障害のある生徒の進学の促進・支援のための高大連携の在り方に関する調査研究を行った。

この研究の目的は、①同志社大学の受験を希望している聴覚障害の高校生(予備校生含む)、高等学校の進路指導教員及び保護者を対象に、同志社大学の「障がい学生支援」制度を活用して、志望学部・学科の基礎・教養科目の講義保障を体験してもらい、体験の有無による進学意欲並びに大学進学への促進に関する影響・効果をはかること、②上記の影響・効果の測定方法として、講義保障の体験者へのヒアリング、アンケート調査を行うこと、③近畿圏内の高等学校、特別支援学校、予備校へアンケート調査を実施し、回収した結果について、講義保障体験者のヒアリング調査結果とあわせて分析、評価することの3点である。

そこで、まず2008年度は①近畿2府4県、同志社大学合格実績を勘案した高等学校(予備校・特別支援学校含む)335校へアンケートを配布・回収し、②それらの学校の中で希望のあった学校・生徒に講義保障体験をしていただき、ヒアリングを行った。

アンケートの回収率は4割弱(37.7%)とそれ程高くはなかったが、このような後期中等教育を主たる対象としたこの種の調査は見かけないことから、この結果から大学が学ぶ点が多いと考える。例えば、身体に障害のある生徒を受け入れた経験のある高校(または障がい生徒の修学支援に一定の関心を寄せている高校)からの回答が集中した可能性があるとはいえ、過去に障がい生徒が在籍した高校が78.9%に上ったのは、思いのほか高率であった。また、大学進学にあたっての不安としては、「受験時の条件や配慮の内容」「入学後の支援体制の有無」「授業時の配慮」に回答が集中し、支援や配慮の重要性が浮き彫りとなった。

また、7組計23名の生徒、教員、保護者に講義保障の体験及び体験後ヒアリングを行ったが、その結果、大学で講義を受ける不安は大幅に解消され、大学進学意欲も向上し、大学進学後の講義保障も希望することが分かった。

この年に講義保障体験をしていただいた生徒のうち、1名が2009年に、さらに1名が2010年に本学に入学している事からも、講義保障体験が進学意欲を高めたことが伺われる。

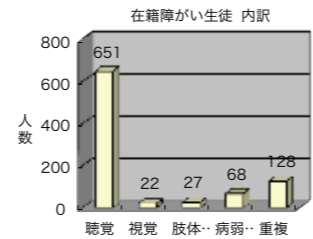
翌2009年度は2008年度より幅を広げ、①近畿2府4県内の高等学校(予備校・特別支援学校含む)793校へアンケートを配布・回収し、②それらの学校の中で希望のあった学校・生徒に講義体験をしていただき、ヒアリングを行った。

アンケートの回収率は3割弱(26.9%)で、前年度と比べ10.8%下がったが、回答数は88校増となり、より多くのデータを得ることができた。また、過去に障がい生徒が在籍した高校が76.3%に上り、前年度に引き続き高い水準となった。

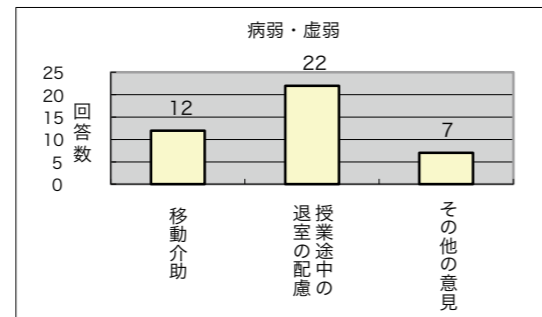
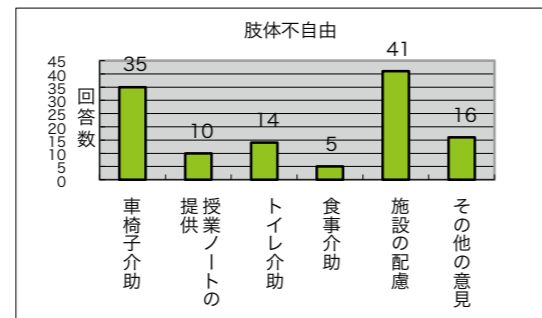
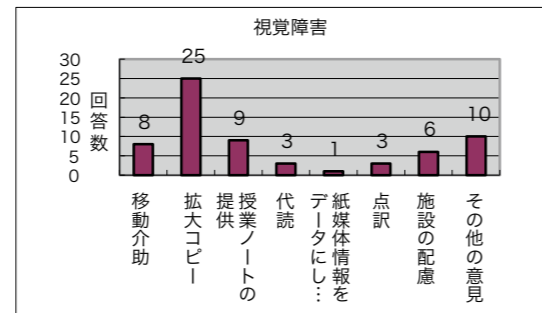
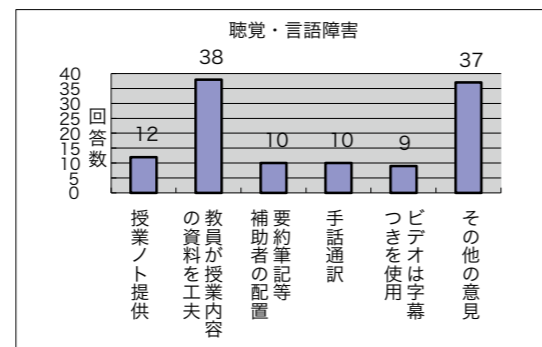
また、昨年同様、大学進学にあたっての不安については「受験時の条件や配慮の内容」「入学後の支援体制の有無」「授業時の配慮」に回答が集中し、支援や配慮の重要性がより明確になった。

2008年障害のある生徒が在籍 60校/123校(48.8%)

	普通校99校	予備校3校	特別支援学校8校	合計
聴覚	56	0	595	651
視覚	20	2	0	22
聴覚・視覚不自由	27	0	0	27
病弱・虚弱	68	0	0	68
重複	5	0	123	128
合計	176	2	718	896



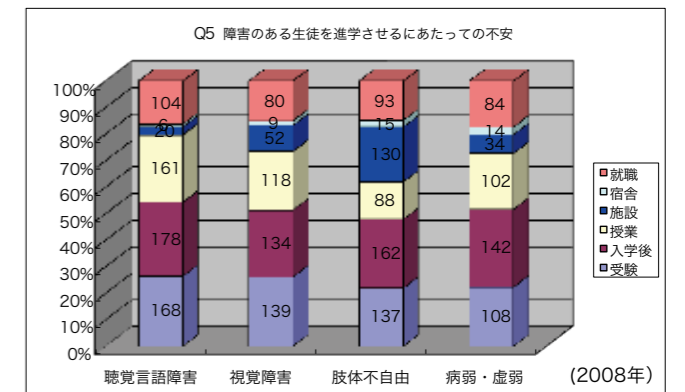
障害のある生徒に対する支援状況(複数回答可)



(2008年)

さらに、1組計10名の生徒、教員、保護者に講義保障の体験及び体験後ヒアリングを行った。今回、体験希望組数が少なかったのは、興味を持っていただいた学校は既に前年に体験いただいていたからであると思われる。しかし、組数は少ないものの、こちらも前年度同様、大学で講義を受ける不安は大幅に解消され、大学進学意欲も向上し、大学進学後の講義保障も希望するという結果となった。

そして最終年度である2010年度は、過去2カ年の講義保障体験、アンケート調査の実績をふまえて、①同志社大学への入学実績のある高等学校、特別支援学校に訪問し、過去の調査結果の検証のためのヒアリングと②海外の取組みとの比較調査のため韓国の大学等へのヒアリング調査を実施した。



延世大学



延世大学 NPO法人障害障(者)学生支援ネットワークとの意見交換



日本国内の高等学校、特別支援学校への訪問の結果、障害支援の意識、バリアフリー、大学進学への姿勢など、高等学校、特別支援学校でも様々であり、それぞれに異なることが判明した。また、高大連携の観点からは、いずれも障がい学生支援に力を入れている京都地区の学校でありながら、同志社大学と京都府立山城高等学校とはお互いにその事実を知らなかったことが判明し、大学と高等学校との間の情報共有に課題があるということも明らかになった。

韓国へのヒアリング調査では、韓国延世大学、韓国ナザレ大学、韓国障害者雇用公団への訪問調査とNPO法人障害障(者)学生支援ネットワークとの意見交換を行った。

韓国における高大連携は、ナザレ大学は障害のある生徒や、彼らが通う高校との高大連携についても積極的であったが、韓国全体では厳しい大学進学競争のもとで、そもそも高大連携という考え方が無いことがわかった。

しかしながら、韓国障害者雇用公団との意見交換では、韓国では日本と比較すると障害者の雇用促進や大学等高等教育への修学支援、財政支援などが法律で義務づけられているなど、国による手厚い障がい者支援の実態を知ることができた。

NPO法人障害障(者)学生支援ネットワークの代表キム・ヒョンズ氏と障がい学生たちとの意見交換では、韓国の障害のある生徒は社会で活躍できるトップクラスの大学への進学を希望しており、キムさんたちは合格のための受験支援を行っていることがわかった。また、韓国では法律によりすべての大学に「障害学生支援センター」の設置を義務付けているが、まだまだ教育現場では障害に対する理解は十分ではないとの意見が学生たちからは出た。

最後に、韓国障害者雇用公団、大学関係者から韓国の障がい者支援の取組みは、日本のそれをモデルにしているとの話を聞いた。文化的、社会的な観点から欧米型の社会福祉、障がい者支援は韓国になじまないとのことであった。今後、海外との比較研究テーマとして面白いかもしれない。

これらの3カ年の研究から、日本、韓国でも高大連携はまだまだ不十分であることや、講義体験や情報提供の強化などの高大連携が高校生の不安を和らげ進学意欲を高めることが分かった。今後はこの研究の成果を基に、高校との相互の情報共有、障害のある生徒の進学上の不安解消策、教職員に対する理解や啓発を勧めるための施策の策定に努めていきたい。



韓国ナザレ大学



延世大学・学生寮



韓国障害者雇用公団

アメリカの高等教育における聴覚障害支援について

Rico Peterson 先生講演会

2010年12月10日(金)、本学室町キャンパス寒梅館6階大会議室にて、PEPNet-Japan事務局である国立大学法人筑波技術大学が招聘された、米国ノースイースタン大学(Northeastern University)の著名な手話通訳研究者であるRico Peterson先生を招き、米国の高等教育における聴覚障がい者へのアクセス保障を中心に講演をいただいた。

学生支援機構長・副学長の龍城正明文学部教授、PEPNet-Japanの運営委員である学生支援センター所長の真銅正宏文学部教授はじめ多くの参加者が集まるなか、Rico先生から「Access Services for Deaf People in American Society(アメリカ社会における聴覚障がい者へのアクセス保障)」をテーマに、ロチェスター工科大学における支援サービスと教育現場における通訳技能評価を中心に講話いただいた。

現在、ロチェスター工科大学は、在学生17,000人のうち、聴覚障がい学生は1,400人、聴覚障害のある教職員は300人、さらにその情報保障のために125人のフルタイム手話通訳者と55人のパソコン通訳者が雇われている。

このような充実した保障の背景には、米国は法律により、幼稚園、小中高、すべての過程において、情報支援をすることが義務付けられていることがあり、そのような教育場で、通訳者たちは通訳の質を追求されてきたという背景がある。

講演終了後の質疑応答では、学生から「アメリカのアクセス保障について、先進だと思ふ分野はありますか」という質問に対し、「第一にアメリカが進んでいると思うのは、政府がサービスを提供しているところで、例えば、テレビ放送には字幕が必ず付いており、ろう者が電話を使うときは手話通訳のついた電話が無料で提供される」と回答があった。また、龍城機構長からの「日本の学校の中で、聴覚障がい者が健常者と勉強をともにする状況が少ない」という質問について、Rico先生は、良い面として、聴覚障がい学生が他の学生と同じ質の教育を受けられること、聴覚障がい学生だけの学校に通う場合は、ろう学生の言語の発達が進む一方、実際に社会に出たときの言語環境で遅れるということがあることを指摘され、そもそも手話を含めて言語の通訳の本質とは何か、という「言語」を通した深い講演会となった。

また、日本の大学で主流となっているパソコン通訳、ノートブックが、アメリカではあまり使われておらず、コミュニケーションの双方向性という観点からの優位性が高い「手話」通訳が主な方法であるという話や政府による手厚い障害支援、教育保障はこれからの日本の聴覚障害支援を考えるにあたって大いに参考になった。



講師のプロフィール Rico Peterson氏
ノースイースタン大学(Northeastern University)手話通訳者養成コース准教授。元来は俳優であったが、演劇ツアーの最中にろう者と出会い、その後手話の世界へ。1976年ギャロウデット大学講師に赴任後、複数の大学で手話通訳者養成に携わる。2000年～2005年にわたり、ロチェスター工科大学NTID手話通訳者養成課程学科長を勤めた後、2005年手話通訳者の養成で世界的に名高いノースイースタン大学に赴任、現在に至る。博士教育学(Ph.D.)。手話通訳士。

代表的な著書に
「The Unlearning Curve: Learning to Learn American Sign Language」(Silver Spring, MD: Linstock Press)
「Interpreting and Interpreter Education: Directions for Research and Practice」(New York: Oxford University Press)など。



VRS
(ブース内のモニターに映る手話通訳者を介して手話で電話(通話)ができる)

教職員研修会



2010年6月17日(木)、障がい学生支援室が毎年実施している「教職員研修会」を開催した。

当日は、富山大学学生支援センター特命准教授の吉永崇史氏を講師にお招きし、「富山大学における発達障害学生への修学・就職活動支援」という演題で講演いただいた。今出川校地寧静館会議室と京田辺校地交隣館多目的ルームをTV会議で結び、約60名超の教職員が参加し、熱心に耳を傾けた。

研修会は龍城正明学生支援機構長の挨拶で始まり、吉永氏は「社会的なコミュニケーションの困難さを抱える学生」は「発達障害をもった学生」の人間像と重なりと話され、発達障がい学生の特性や、修学、就職・キャリア支援の問題点について、説明された。

富山大学では、「トータルコミュニケーション支援室」を中核として、教学部門・キャリア部門・カウンセリング部門等が連携して、包括的な支援を実施していることを紹介された。富山大学における発達障がい学生支援の特徴として、発達障害の診断の有無に係らず支援をしていること、学生のみならず、保護者や教職員へのサポートを行っていること、大学進学を希望する高校生を対象とした移行サポートや、キャリアサポートを挙げられた。また、アスペルガー症候群・ADHD傾向の学生への具体的なサポート事例を挙げられ、相談から支援方針の決定・実施まで、詳細に説明された。

講演終了後には、活発な質疑応答があり、研修会は盛会のうちに終了した。

コラム 学生スタッフから一言

社会学部4年次生 濱咲 弥佳

1年次生の春にスタッフ登録をし、パソコン通訳を中心にサポート活動をしてきました。またそれ以外にも、障がい学生支援制度では多くのイベントや勉強会が開催されていたので、そういった活動にも多数参加させていただきました。いくつかのイベントでは企画・運営の段階から学生がスタッフとして参加し、利用学生・サポートスタッフがともに協力しながらひとつのイベントを作り上げていくので、普段のサポート活動では知らなかったことを学べたりイベント終了後もつながる関係ができたりと、単なるサポート活動だけでない関係をたくさん築くことができました。また、障がい学生支援を通じて他大学とも交流があり、他大学の状況や取り組み、そこで頑張る方々などとお会いする機会もありました。

障がい学生支援制度に関わっている利用学生やサポートスタッフは、ただ人数が多いだけでなく、様々な学部・学科、サークル活動、過去の経歴・経験…など、一人ひとりが持つ

個性が多種多様で、多くの人生、様々な考え方に出会うことができるのもこの制度の大きな特徴です。個性的なメンバーの中で、障害について真剣に考えたり議論を重ねたり、あるいは、どのようにサポートすると良いのかを考えながら一緒に遊びに行ったりもしました。私はそれまで、障害を持った人と関わった経験がほとんどなかったのですが、イベントを通じて学んだりメンバーと語り合うことで知ったりすることが多くありました。サポートスタッフも利用学生もお互いに知らないことは多くありますが、だからこそお互いの立場を尊重する大切さや、知らないことについて素直に尋ね合うことの大切さを学ぶことができました。サポートする・されるという一方的な関係ではなく、お互いに助け合い、協力し合う関係を築くことができ、多くのことを学ぶことができた4年間だったと思います。

学際科目「心のバリアフリー」をめざして

2010年8月31日から9月4日にかけて、大学コンソーシアム京都にて、同志社大学提供の学際科目「心のバリアフリー」をめざしてが開講されました。1日3コマ5日間という夏期集中講義は2単位付与され、受講者は41名でした。特徴は、大学コンソーシアム京都の単位互換制度により、他大学に開放され、本学だけでなく、立命館大学、京都女子大学、京都薬科大学などの学生も受講し、大学間のバリアも越えた科目となっています。

この科目は、「コミュニケーションのバリアフリー」をキーワードとして、障がい学生とそれを支援するスタッフ双方の気付きに着目しながら、自律的な成長の実現を目指し、設置されました。講義は、「知る(meet)」→「出会う(face)」→「向き合う(experience)」→「つながる(share)」→「超える(realize)」で構成され、前半では、主として聴覚障がい学生の講義保障の実際を理解し、障がい学生とそれを支援するスタッフ双方が向き合うバリアとは何かについてロールプレイやワークショップを通じて学びました。うち、1日は、ガイドヘルプや車椅子介助といったサポートをするだけでなく、アイマスク体験や車椅子体験といったサポートを受ける側の気持ちに出会い、理解を深めました。後半では、地域社会で障がい者支援に従事する実践家や、企業にて勤務する障害のある人など、ゲストスピーカーを多数招聘した上で、ディスカッションを重ねました。お互いが思いや意見を交わす中で相手の気持ちに触れ、向き合い、本当のバリアは物理的なものではなく、心の中にあるということに気がしました。学際科目は3年間の講義として提供します。「心のバリアフリー」をめざしての科目が2010年度で3年目を迎えるにあたり、「Challengedキャンプとの連動」を試みました。具体的には、座学として正課授業である本科目を受講した後、臨床の学びとして障害体験とサポート体験を中心に展開される2泊3日のキャンプの参加を促し、体系的な学びを可能としました。



モコゲーム(聴覚障害者体験)



アイマスク体験



クロストーク



グループディスカッション

8月31日(火)
第1日目
バリアを知る
(meet)

第1講【講義】

援助するということについて
-支える支えられるの関係を考える-
木原 活信

第2講【講義】

聴覚障がい学生とその支援方法
-聴こえない立場の体験をとおして-
(ゲストスピーカー:NPOモコクラブ 代表 原田 美藤)
原田 美藤

第3講【講義・体験】

モコゲームを通じて、聴覚障がい者への理解を深める
(ゲストスピーカー:NPOモコクラブ 代表 原田 美藤)
原田 美藤

9月1日(水)
第2日目
バリアと出会う
(face)

第4・5講【体験】

障害全般についておよび障がい者について体験を通して考える
(車椅子・アイマスク体験、ガイドヘルプ体験)
西村 卓

第6講【討論】

「バリアとは何か?」をテーマとしてグループディスカッション
山口 洋典

9月2日(木)
第3日目
バリアと
向き合う
(experience)

第7講【講義】

地域社会と障がい者支援(1)-各々の現場から-
(ゲストスピーカー:(社福)全国手話研修センター
事務局長 小出 新一)
(ゲストスピーカー:(社福)京都ライトハウス
情報ステーション所長 加藤俊和)
(ゲストスピーカー:京都市聴覚言語障害センター 浅井 ひとみ)
西村 卓

第8講【講義】

地域社会と障がい者支援(2)
-ゲストスピーカーを交えてのクロストーク-
西村 卓

第9講【講義】

「地域社会における障がい者支援の現状」
「大学生と地域社会との関わり」などをテーマとしての
グループディスカッション
西村 卓 山口 洋典

9月3日(金)
第4日目
バリアと
つながる
(share)

第10講【講義】

障害を阻む生活-障害者と仕事-
日下部 隆則

第11講【講義】

障害が育む文化-障害者とスポーツ-
竹田 正樹

第12講【討論】

「バリアとは何か?」をテーマとしてグループディスカッション
日下部 隆則

9月4日(土)
第5日目
バリアを超える
(realize)

第13・14講【講義と討論】

「自分の中の気づきや変化」、「心のバリアを取り除く」などを
テーマとしてのグループディスカッション
西村 卓 山口 洋典

第15講【報告会】

最終報告会-グループ別発表表-
西村 卓 山口 洋典

Challenged キャンプ2010



障害のある学生と、他の学生が2泊3日寝食を共にしながら、音がない・光がない・身体が利かないという体験をしながら交流することを目的に、障がい学生支援室主催で「Challengedキャンプ」を9月9日(木)～11日(土)石川県羽咋市能登千里浜にて実施した。参加者は、本学学生26人、学生支援センター所長の真銅正宏文学部教授、全学共通教養教育センター日下部隆則講師、障がい学生支援室スタッフ4人である。

初日は、9時30分に室町キャンパス寒梅館に集合し、真銅所長の挨拶の後、車椅子・アイマスク・イヤホンをし、地下鉄・近鉄を利用して寒梅館から京田辺キャンパスまで移動した。真銅所長も自ら車椅子体験をし、音がないことによる孤独、身体が利かないことによる苛立ちと、それらの気持ちをまだ受け止めることのできない介助者の思いと共に、通常一時間程度で到着する京田辺キャンパスまで、午前中いっぱい費やして移動、休む間もなく、バスに乗り込み能登千里浜を目指した。

宿舎到着後は、チャレキャン恒例の暗闇の晩餐を実施した。ここでも、真銅所長自らアイマスクをつけ、学生の介助を受けつつ「全く食べた気がしない。こんなに視覚情報が味覚を変えるなんて!」との感想にアイマスク体験者の多くが頷き、見えていることに生まれて初めて感謝した。

2日目は、2班に別れ能登千里浜に広がる日本海を堪能した。まず、車椅子に乗って釣りをするグループでは、日下部先生から、釣りのレクチャーを受けた後、車椅子に乗っている学生

を囲みながら海に向かって竿を投げた。一方、アイマスクをして砂浜を散歩するグループでは、砂浜と潮風を感じながら目の代わりとなってガイドしてくれる仲間の声を頼りに貝を拾った。参加者からは「お互いに相手の話を聞くこと、伝えることの難しさ喜びを知った」「私には聴覚に障害があるけれど、自分自身の障害についてもまだまだわかっていないことに気づいた」との感想が出た。

最終日、日下部先生より「一番問題なのは、知らないことである。まず知らないことを知る大切さを知っていただきたい。知る→分かる→変わる→変えるのサイクルをつくり上げてください」「3日前にちょうどここからスタートしました。その時の気持ちと今の気持ちを比べてください。その差がキャンプのひとつの成果です」とのメッセージをいただいた。参加学生からは「困っている人がいれば、自然にサポートできるようになりたい」「今回の経験を「体験」で終わらせるのではなく、日常に活かしていきたい」「自分自身、妥協することが多いので、自分に甘いところがある。そんなことでは他の人を助けることができないので、まず私生活から変えて行きたい」「本当にとてもいい仲間ができた」「本当にいい経験になり、いろいろ考えるきっかけになった。自分でも出来ることがあることがわかったので、これから実行していきたい」など前向きな感想や意見が多数寄せられた。

参加者は新たな気持ちを持って、新たなチャレンジに向かって決意を新たにし、帰路についた。

PEPNet-Japanシンポジウム2010

2010年11月14日(日)に仙台市情報・産業プラザにて、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)主催「第6回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」が参加者314人を集めて開催された。

本シンポジウムは、全国の大学における支援実績に関する情報を交換するとともに、PEPNet-Japanの活動成果をより多くの大学・機関に対して発信することで、今後の支援体制発展に寄与することを目的としたものである。

本学からは、同時開催された全国障害学生支援大学長会議に出席した龍城正明副学長、真銅正宏学生支援センター所長と障がい学生支援室から支援コーディネータ等5名のスタッフ及び学生4名が参加した。

シンポジウムでは、ランチセッション企画として「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト」(ポスターセッション)が同時に開催された。今回は、全国14大学・機関がエントリーし、作成したポスター、映像、資料等を会場に展示して来場者への取組みの説明など活発なポスターセッションを繰り広げた。

本学からは、学生4名が作成したポスターと支援室編集の映像でセッションに臨んだ。審査の結果、本学の「心のバリアフリーをめざして、Challengedキャンブ」が優秀な取組みとして、準PEPNet-Japan賞(2位)を受賞した。

表彰式では、学生から「今回、ポスターセッションで紹介した授業とキャンブについては、学生スタッフとして6月から関わってきた。それが成果として認められたことが嬉しい」、また「キャンブで得られたみんなの素敵な笑顔が全国の大学に広まることを願っている」など喜びのコメントが披露され、会場は大きな拍手に包まれた。

◆受賞した学生は以下のとおり

(左から)

文化情報学部文化情報学科2年次生	北出 ひかりさん
理工学部機械システム工学科3年次生	棚瀬 将康さん
社会学部社会学科4年次生	濱咲 弥佳さん
法学部法律学科2年次生	田邊 佳代子さん



【2010年度 PEN-International イギリス夏期リーダー研修会への参加】

聴覚障がい学生 丹後偉也

理工学部情報システムデザイン学科2年次生

主催: PEN-International
主催地: Herstmonceux Castle

日本、アメリカ、中国、ロシア、フィリピンから選ばれた聴覚障害の学生がともに集い、聴覚障害者として社会にアピールしていくためのセルフアドボカシースキルを学ぶことを目的に実施されているこの研修会は、2006年度より隔年で開催されており、2010年度は筑波技術大学より2名、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)連携大学・機関より2名の学生が募集され、本学より理工学部情報システムデザイン学科2年次生の丹後偉也くんが参加した。

主催のPEN-Internationalとは、聴覚障害者のための国際大学ネットワーク(Postsecondary Education Network International)の略であり、聴覚障害者を支援するための知識やノウハウを共有し、聴覚障害学生によりよい学習環境や就労の機会を提供することを目的として、聴覚障害者のために高等教育を提供している世界の大学による国際的なネットワークとして2001年に創設された。PEN-Internationalの本部は米国のNTIDに設置され、日本、中国、ロシア、フィリピン、タイ、チェコ、韓国の大学や機関がネットワークに参加している。



研修日程

月 日	スケジュール
8月21日(土)	移動(日本⇒イギリス)
8月22日(日)	アイスブレイク・各国によるろう者のリーダー発表
8月23日(月)	各種ワークショップ・レクチャー (リーダーシップとは何か/異文化理解/カルチャーナイト<日本&フィリピン>)
8月24日(火)	各種ワークショップ・レクチャー (ネットワークと人間関係づくり/ろう者と仕事/カルチャーナイト<米国&中国>)
8月25日(水)	ワークショップ (目標設定/ロールモデル/カルチャーナイト<ロシア>)
8月26日(木)	ワークショップ・レクチャー(振り返り)
8月27日(金)	ワークショップ・レクチャー(振り返りとまとめ)
8月28日(土)	移動(イギリス⇒日本)

【2010年度 PEN-International イギリス夏期リーダー研修会への参加】

2010年8月21日(土)から28日(土)にかけて、多くのプログラムをこなしてきました。まず、初日は、各々、自国の手話で自己紹介から始まります。アイスブレイクでは、ASL(アメリカ手話)をされてもほとんどわからないので、筆談が主となり、何とかジェスチャーでやり過ごしました。

ASLから日本の手話へ翻訳してもらいましたが、解読スピードが求められ、所々読みこぼし、質問しようにも、それが見逃した情報なのか、実際に足りなかった情報なのかが分からない、そんな状況でした。

次の日のプレゼンでは、4カ国混血ファミリーの話の話を聞きました。日本では、ハーフでも珍しいので、大変興味深かったです。お葬式の様式の違いなど、文化と文化の衝突はあったようですが、だからよけいに、外国人は自分の事の紹介をはっきりするのだそうです。

「異文化を理解する」レクチャーでは、写真のみの情報から議論が始まりました。全ての国が異なる考えというわけではなく、同じ考えも目立ちました。

文化の違いは、笑いの受け取り方にもあります。例えば、知らない女性が笑いかけてきた場合、「アメリカでは誘惑である」と感じたり、「ロシアでは不審な気味が悪い人である」と感じ取るなどのことでした。国によって文化の違いによる誤解がおこりやすいため、その国に行く、もしくはその国の人に会う場合はあらかじめ、最低限の知識に興味をもつ必要があると思いました。

三日目から、音声通訳に切り替えてもらいました。手話も大事ですが、残存聴力のある僕にとって音声情報も入ることによって、議論ができるようになりました。

この日は、「自国で、聴覚障害者コミュニティが抱える主な問題」について議論し、各国、大体が通訳者不足と雇用の問題でした。この議論により、僕はあまり深刻な問題に直面したことがないと実感しました。その分、これからわかる就職活動で必ず起きるであろう問題に大きなショックを受けてしまうかもしれないという不安とともに、その解決策を考えておくべきだと思いました。

四日目の朝、自分の目標を書き、実現のためのステップを細かく考えました。ステップを分析することで、少し高めの目標が、目前に迫っているような、そんな気にさせてくれました。目標に必要な行動や資源を把握して期限を設けて紙に書き記すことによって、自分のやるべきことが明確になり、着実に目標達成につながる事がわかりました。

最終日の内容は盛りだくさんでした。特に多重知能については、興味深く、人の能力を見極めるために必要な知識だと思いました。また、長所ばかり見つめるのではなく、短所も見つめる必要があることはわかりますが、他人に対して短所を指摘するのはとても難しいです。自分の短所に気づき、改善に努めながら、その姿を見せて自主的に思い起こす事ができれば、それがベストだろうと僕は思いました。

最後に、活動のために必要なリーダーシップの要素として、一番重要なのがネットワーク、つまり、他の団体とのつながりを大事にするということだと思いました。

人と人とのネットワークだけでなく、人を通してできた団体組織と団体組織とのネットワークが社会の組織には必要だということです。

僕が社会でリーダーになったときも、ネットワークが一番大事にしていきたいと思えます。



ランチタイム手話・京田辺燭火讃美礼拝・クリスマス礼拝



【ランチタイム手話】

障がい学生支援室では、開講期間中、京田辺校地で毎週火曜日に嗣業館1階学生支援センター内ラウンジで、今出川校地では毎週木曜日に寒梅館1階BOX-Aで楽しく手話でお話、勉強する場を設けている。ランチタイム(12:30-13:00)という限られた時間ですが、お弁当を食べながら、聞こえない学生も聞こえる学生も手話という言葉を用いて、学年や学部を超えた交流をしている。

「私は文学部2年生です。えっと・・・趣味は読書です」と緊張しながら表現していた手話も、年度末が近づくとつれ、「昨日、映画観に行ったよ。今度、どこか行こうよ」「温泉でも行こうか」と話が弾む。手話を知らなくても『伝えたい』という気持ちがあれば伝わることを知り、温かい輪がそこに生まれてくる。

【京田辺燭火讃美礼拝、クリスマス礼拝】

同志社大学では、毎年クリスマスが近づくと両キャンパスでクリスマス燭火讃美礼拝が執り行なわれる。2010年度、京田辺では12月11日(土)に同志社新島記念講堂で、今出川では12月18日(土)に栄光館ファウラーチャペルで、夕刻、讃美歌1149(めさめてたえまつれ)とともに聖歌隊が入堂し会場が暖かく灯された。

この礼拝には、毎年手話通訳がつくが、ランチタイム手話で少しづつ手話を覚えたスタッフや興味のある学生が1ヶ月前から聴覚障がい学生から指導を受けて聖書物語や聖書朗読箇所の手話表現の練習をしている。学生は本番当日もギリギリまで舞台袖で練習をして練習の成果を披露した。



学生の声

クリスマス礼拝という活動を通して自分の中で得たものは非常に大きいです。まず、聖書の朗読箇所を手話で行うとき、聖書の日本語文をいったん手話的な単語に訳し、日本語を砕くという行為が必要で、伝えたい内容になるよう並び替え、さらに、朗読者の読み上げるスピードについていかなければなりません。本番で自分が舞台の上に入ったとき、口頭で伝えるときよりも、何を伝えたいのかを意識することができました。自分を表現するということを学べたのが一番大きいと思います。

社会学部教育文化学科
1年次生 竹内由記子

私は数年前から手話に興味があり、いつか必ずやってみようという思いを持っていましたが、実現しませんでした。しかし、今回の思いが実現できたことを心から嬉しく思い、このような機会を与えて指導して下さった支援室やスタッフの方々に感謝しています。実際にやってみると、慣れない動きに苦戦し、教えてもらった通りに手を動かすことに必死でした。通学時間や授業中にこっそり練習を繰り返して、ランチタイム手話を利用して何人かの人の前で手話をする中で、「手話とは私のためにあるものではなく、それを必要としている人に情報を伝える手段として存在している」ことが気がつきました。それから、大きくはっきりと手や指を動かすことを意識しました。本番はとて緊張しましたが、自分の自信にもつながり、楽しみながら手話をする事ができました。

文学部哲学科
3年次生 田山久瑠実

私はランチタイム手話に参加して手話に関心があります。今回の手話通訳に参加するに至った動機は、もっと手話について知りたいという思いがあったからです。手話通訳の練習は合計三回あり、初回練習のときは覚えられないだけでなく、見て覚えるからです。一つ一つの単語を覚えて流れをつかむようにしました。二回目と最後の練習は、不思議と不安はありませんでした。今回、クリスマス礼拝の手話通訳をして得たことは、「手話は言葉」だという認識を得たことです。言葉のインプットとアウトプットの仕方が違うだけで、「意思」「伝えたいこと」を発信することは全く同じであるということを実感しました。

法学部政治学科
2年次生 好光結希

コーディネータ年間スケジュール

4月	入学式(障害のある新入生および保護者の方へのサポート・式典通訳・学部説明会対応) オリエンテーション期間(新入生サポート対応・スタッフ勧誘) 新入生面談 春学期 制度利用学生へのコーディネート(派遣内容確認→派遣調整→配慮依頼と派遣) 制度スタッフへのコーディネート(顔合わせ会→登録手続き→活動内容確認→派遣調整) 制度説明会・入門講座
5月	システム月次処理に合わせて実績データ表数値埋め込み作成(随時) 心のバリアフリー案(体験授業)作成 新入生歓迎会 入門講座&フォローアップ勉強会(5月~7月)
6月	教職員研修会
7月	春学期末試験のコーディネート 春学期末懇談会 オープンキャンパス
8月	寒梅館夏祭り 複合領域科目:「こころのバリアフリー」を考える(5日間集中講義)
9月	Challengedキャンプ(2泊3日) 利用学生面談 秋学期 制度利用学生へのコーディネート(面談→派遣内容確認→派遣調整→配慮依頼と派遣) 制度説明会・入門講座
10月	入門講座&フォローアップ勉強会(10月~12月)
11月	クローバー祭(同志社京田辺祭) PEPNet-Japanシンポジウム 障がい学生対象就職ガイダンス 新年度予算案作成
12月	クリスマス学生交流会 クリスマス礼拝手話通訳
1月	秋学期末懇談会 秋学期末試験のコーディネート
2月	新年度スケジュール作成 各種パンフレット ガイド作成
3月	利用学生(在学)面談 次年度新規で制度利用者の面談(本人・保護者・学部・教務主任・支援室) 次年度スタッフ強化勉強会 卒業式(式典通訳・サポート)

同志社大学障がい学生支援室について

1. 本学における障がい学生支援について

同志社大学の障がい者支援は1949年に遡る。入学試験において、日本の大学で初めて点字受験の対応を開始した。1975年、点訳・墨訳担当者を配置し、試験問題の点訳を開始。1982年には学長の諮問機関として「障害者問題委員会」を設置し、これを契機に今出川校地内建物入口スロープや自動昇降機を設置、1984年からは語学テキストの点訳業務を開始した。

1986年、京田辺キャンパスの開校にあたり、キャンパスの基本設計から全面的なバリアフリー化をはかり、図書館内には点字室や対面朗読室を設けた。2000年3月、「障害者問題委員会」からの学長宛て答申を契機として「障がい学生支援制度」がスタートし、翌2001年に同委員会からの再答申により、講義補助から講義保障へと一段と踏み込んだサポートが開始された。この際、一部の支援で、サポートスタッフの活動を有償化した。

2002年には「障害者問題委員会」を「ノーマライゼーション委員会」と名称変更し、学内の障がい学生の総合的相談窓口を、学生部(現在の学生支援センター障がい学生支援室)に一本化した。2004年、今出川・京田辺の両キャンパスに常勤の障がい学生支援コーディネータを配置し、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-japan)の連携協力を開始。2006年には日本学生支援機構(JASSO)の「障がい学生就学支援ネットワーク事業」の拠点校として連携協力を開始した。

2007年にはアシスタントスタッフ(有償)とボランティアスタッフ(無償)を統一し、「サポートスタッフ」として全支援を有償化した。

2008年、「ノーマライゼーション委員会」を発展解消し、「学生主任連絡会議」に整備・再編し、学生支援センター内に「障がい学生支援室」を設置した。

2009年秋より、事務組織上、障がい学生支援室を京田辺校地学生支援課に一元化した。

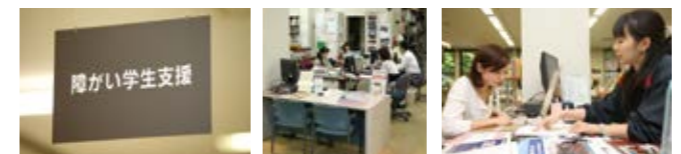
2. 障がい学生支援室

専属の障がい学生支援コーディネータが常駐しており、障がいのある学生に対して学生サポートスタッフの協力を得て、授業保障に関わるサポートを行う。

授業保障とは、障害のある学生が希望するすべての授業について、一般学生と同じレベルで受講できるよう保障することである。

1) スタッフ

マネージメント	真銅正宏 田鍋耕三 宮崎與也 吉川春菜	学生支援センター所長・文学部教授 京田辺校地学生支援課長 京田辺校地学生支援課学生生活係長 京田辺校地学生支援課学生生活係員
コーディネータ	土橋恵美子 渡部由利子 仲兼久知枝	京田辺校地担当 今出川校地担当
事務補助員	長村香織 志摩祐子	京田辺校地担当 今出川校地担当

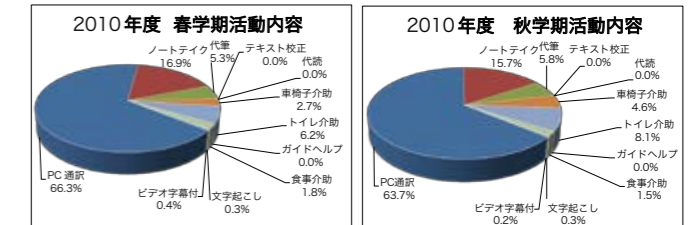


編集後記

このたび、かねてからの念願であった障がい学生支援広報誌「あまねく」の創刊号を発刊する運びとなりました。年度末の間際となつてから開始した原稿作成と編集作業は時間との競争となりましたが、編集担当から依頼した原稿を快く執筆してくれた障がい学生支援室のメンバーや学生たちの協力でなんとか発刊までこぎつけることができました。広報誌の作成を通じて、あらためてこの1年間も障がい学生支援に関わるさまざまな取組みが行われたものだと感じました。また、誌名の「あまねく」を命名いただいた真銅正宏学生支援センター所長(文学部国文学科)には、障がい学生支援に関するやわらかなイメージを想定した和文の

学生サポートスタッフ

2010年度秋学期は370名のサポートスタッフがいるが、そのうち350名は現役の本学学生・大学院生です。一番多いのは、聴覚障がい学生に対するPC通訳・ノートテイクです。



支援の内容・種類

- 聴覚障害
PC通訳、ノートテイク、手話通訳、ビデオ文字起こし、ビデオ字幕付、ノートテイク用消耗備品の支給
- 視覚障害
講義資料、試験問題、電子データ化、拡大コピー、対面朗読、代筆、代読、ガイドヘルプ、点字機器、拡大読書機等の利用、点字室・対面朗読室の利用
- 肢体不自由
代筆、車椅子介助(学内移動)、トイレ介助、食事介助、車両の入講及び駐車許可、ストレッチ用休憩室の利用
- 内部障害
ガイドヘルプ、車両の入構及び駐車許可、受講時の配慮

3. 障がい学生の在籍状況

現在本学では96名の障がいを持った学生が在籍しており、その内23名の学生が授業支援を受けている。

	障がい学生数	障がい学生支援制度登録学生数
聴覚障害	53	13
視覚障害	10	1
肢体不自由	19	7
内部障害	11	1
重複障害	3	1
合計	96	23

4. サポートしている週当たりの講義コマ数(2010年度春学期)

京田辺キャンパスで約100コマ、今出川キャンパスで約30コマを支援している。計130コマの支援に延べ約260名の学生サポートスタッフがサポートに入っている。

誌名をとわがままな願いをしました。「あまねく」とは、ユニバーサルをあらわし、本学がめざすユニバーサルデザインの志とも通ずるよい誌名だと障がい学生支援室一同、喜んでいました。最後に、いつも本学の障がい学生支援にご協力をいただいている教職員、学生をはじめ関係各機関のみならず深く感謝を申しあげて編集後記とさせていただきます。

2011年3月
同志社大学学生支援センター
障がい学生支援室 田鍋 耕三

